

JD Edwards EnterpriseOne Tools

One View管理ガイド

リリース9.2

E67817-01

2015年10月

JD Edwards EnterpriseOne Tools
One View管理ガイド

E67817-01

Copyright © 2012, 2015, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次のNoticeが適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。お客様との間に適切な契約が定められている場合を除いて、オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。お客様との間に適切な契約が定められている場合を除いて、オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	9
対象読者	9
ドキュメントのアクセシビリティ	9
関連情報	9
表記規則	9
 I. One View Reporting管理	11
1. One View Reportingについて	13
1.1. Oracle BI PublisherとJD Edwards EnterpriseOne	13
1.2. One View Reportingの概要	14
1.3. One Viewレポートについて	15
2. One View Reportingのインストールおよび構成	17
2.1. Oracle BI Publisherのインストール	17
2.1.1. Oracle BI Publisherのインストールの概要	17
2.1.2. 事前設定	18
2.1.3. Oracle BI Publisherのインストール	19
2.1.4. 新規バージョンのOracle BI Publisherへのユーザーの移行	21
2.2. BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレートのインス トール	22
2.3. ボイラープレートへのBIAuthorロールのアクセス権限の付与	23
2.4. BI Publisherユーザーの構成	24
2.5. One Viewレポートの概要および管理	26
2.6. One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートの確認	26
2.6.1. ソフトコード値のガイドライン	27
2.6.1.1. HTTPアドレス	27
2.6.1.2. ユーザー名	27
2.6.1.3. _ _BI_PASSWORD_ _	28

2.6.1.4. bip url	28
2.7. One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードの作成	28
2.7.1. 概要	28
2.7.2. ソフトコード・レコードの作成	31
2.7.3. ソフトコード値のガイドライン	32
2.7.3.1. HTTPアドレス	33
2.7.3.2. ユーザー名	33
2.7.3.3. <code>__BI_PASSWORD__</code>	33
2.7.3.4. bip url	33
2.8. BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピ ング	33
2.9. One Viewレポートのインストール	34
2.10. 構成設定の処理	36
2.11. HTML Serverクラスタリングに関する考慮事項	37
3. 管理タスク	39
3.1. One Viewレポートおよびログ・ファイルの場所	39
3.2. 言語サポート	39
3.3. トラブルシューティング	41
3.3.1. 「One View」メニューがアプリケーションに表示されない	41
3.3.2. 「One View」メニュー・アイコンをクリックしても何も起こらない	41
3.3.3. レポートの保存時にエラーが発生する	41
3.3.4. BIPレイアウト・エディタですべてのレポートについてエラーが発 生する	42
3.3.5. 「レポートを保存できませんでした」というエラーが発生する、ま たは共有レポートの実行中に問題が発生する	42
3.3.6. BI Publisherの「コンポーネント」フォルダにボイラープレートがな い	42
3.3.7. One Viewレポートのインポート中のバージョン不一致エラー	44
3.3.8. レポートが最大レコード数を超えた旨の警告	44
3.3.9. レポートが存在しないため、レポートにアクセスできない	45
3.4. パフォーマンスに関する考慮事項	45
3.5. スケーラビリティに関する考慮事項	45

II. One View財務諸表の管理	47
4. One View財務諸表の構成	49
4.1. One View財務諸表用のOracle BI Publisherの構成	49
III. One Viewウォッチリスト管理	51
5. One Viewウォッチリストの管理タスク	53
5.1. トラブルシューティング	53
5.1.1. ウォッチリストが実行されない	53
5.1.2. 「更新に失敗しました - クエリーが見つかりません」エラー	54
5.1.3. ユーザーにウォッチリストへのアクセス権がない	55
5.2. パフォーマンスに関する考慮事項	55
用語集	57
索引	59

図の一覧

2.1. JD Edwards EnterpriseOneおよびBI Publisherでのユーザー設定	24
2.2. ビューア・グループと設計者グループの例	30
3.1. サーバー構成	43
3.2. 権限	43
5.1. グローバル・プラグイン構成の更新	54

まえがき

『JD Edwards EnterpriseOne Tools One View管理ガイド』へようこそ。

対象読者

このガイドは、One View Reportsのインストールおよび構成を担当するシステム管理者と技術コンサルタント、ならびにOne Viewウォッチリスト管理を担当するユーザーを対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティ

オラクル社のアクセシビリティへの取組みの詳細は、Oracle Accessibility ProgramのWebサイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracleサポートへのアクセス

サポートを購入したオラクル社のお客様は、My Oracle Supportを介して電子的なサポートにアクセスできます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>、聴覚に障害があるお客様は<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>を参照してください。

関連情報

JD Edwards EnterpriseOneのアプリケーション、機能、コンテンツおよびトレーニングの詳細は、次の場所にあるJD Edwardsリソース・ライブラリのJD Edwards EnterpriseOneページを参照してください。

<http://learnjde.com>

このガイドでは、構成ファイル(jde.ini, jas.ini, jdbj.ini, jdelog.propertiesなど)に格納されるサーバー構成設定に触れています。JD Edwards EnterpriseOne Toolsリリース8.97以降、サポートされているサーバー・タイプの設定にアクセスして管理する際には、必ずServer Managerプログラムを使用することを強くお勧めします。

表記規則

このドキュメントでは、次の表記規則を使用します。

表記規則	説明
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、ブック・タイトル、強調、または特定の値が指定されるプレースホルダの変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォント・タイプは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に含まれるコード、画面に表示されるテキスト、またはユーザーが入力するテキストを示します。
> チュートリアル	説明されている機能の動画へのリンクを示します。この動画はMP4形式のため、対応するプレーヤをインストールしておいてください。この動画にアクセスするには有効なOracleアカウントが必要です。

パート I. One View Reporting管理

JD Edwards EnterpriseOne One View Reportingによって既存のレポートを実行したり、テーブル、グラフおよびチャートを含む新しいレポートを作成して、PDFドキュメント、HTML、Excelスプレッドシートなどの様々な形式で表示したりすることが簡単にできます。また、多くのレポートでレポート・データを対話的にフィルタ処理してさらに分析を行うことが可能です。

構成は次のとおりです。

- [1章「One View Reportingについて」](#)
- [2章「One View Reportingのインストールおよび構成」](#)
- [3章「管理タスク」](#)

第1章 One View Reportingについて

この章の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI PublisherとJD Edwards EnterpriseOne」
- 「One View Reportingの概要」
- 「One Viewレポートについて」

1.1. Oracle BI PublisherとJD Edwards EnterpriseOne

JD Edwards EnterpriseOneには、Oracle Business Intelligence (BI) Publisherとの統合が3種類用意されています。各統合は特定のレポート要件に対応しています。それは、顧客向けのドキュメントを生成すること、エンドユーザーが独自の業務レポートを作成できるようにすること、パワー・ユーザーおよびITスタッフが複雑なアドホック・レポートを作成できるようにすることです。この項では、各統合の概要とそれぞれの一般的な使用例を示します。

- **JD Edwards EnterpriseOne用の組込みBI Publisher:** UBEの出力を顧客向けのドキュメントに変換します (Pixel Perfect)。JD Edwards EnterpriseOne用の組込みBI Publisherの一般的な使用例には、請求書、計算書、ピッキング・リスト、小切手などがあります。

詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Tools BI Publisher for JD Edwards EnterpriseOne Guide』を参照してください。

- **One View Reporting:** エンドユーザーがカスタマイズされたレポートの作成および実行をJD Edwards EnterpriseOneの対話型アプリケーションから直接行えるようにします。これらのレポートは一般に、ユーザーまたはロール固有であり、ユーザーが通常業務の一環として毎日、毎週のように定期的に実行するものです。この種のレポートでは、データ選択、順序、含めるデータ・カラム、およびデータ視覚化 (チャート、テーブル、グラフ) に関して高度なカスタマイズが必要になります。これらのエンドユーザー・レポートを使用すると、日々の標準的なビジネス・プロセスの一部である業務データの可視性が高まるため、ユーザーの生産性が向上します。One View Reportingにより、ユーザーはJD Edwards EnterpriseOneアプリケーションの内部からデータ・フィールドを選択して特定のデータ選択を実行し、BI Publisher内のレイアウト機能を活用してレポート出力のフォーマットを定義することができます。一般的な使用例には、売上レポート、顧客レポート、仕入先レポート、従業員レポート

などがあります。このガイドでは、One View Reporting統合のインストール、構成および管理タスクと使用例について説明します。

- **アドホック・レポート:** パワー・ユーザーやITスタッフが強力なクエリーを作成して、随時データを照会できるようにします。この種のレポートは、通常のビジネス・プロセスの範囲を外れた特殊なビジネス要件を満たすために作成するのが一般的であり、1、2回しか実行されません。一般に、これらのレポートではユーザーがSQL文を作成してデータを取得する必要があります(クエリー・ビルダー)。クエリーは通常、JD Edwards EnterpriseOneのデータ・スキーマを理解しているIT部門またはパワー・ユーザーが作成します。クエリーの作成後、IT部門またはパワー・ユーザーはデータ表示用のテーブルやチャートを含めたレポート・レイアウトを作成します(テンプレート・ビルダー)。この統合は、JD Edwards EnterpriseOne JDBCドライバとOracle BI Publisher Enterprise Editionを利用しています。この統合は一般に「対話型レポート」と呼ばれています。当然ながら、一般的な使用例はありません。

1.2. One View Reportingの概要

オラクル社のJD Edwards EnterpriseOne One View Reportingは、Oracle BI Publisherでデータにアクセスしてレポートを生成するための直観的で使いやすい方法を提供します。

既存のレポートを実行したり、テーブル、グラフおよびチャートを含む新しいレポートを作成して、PDFドキュメント、HTML、Excelスプレッドシートなどの様々な形式で表示したりすることが簡単にできます。また、多くのレポートでレポート・データを対話的にフィルタ処理してさらに分析を行うことが可能です。

One View Reportingでは、標準およびカスタムの検索/表示フォームを使用してレポート・データを検索できます。また、結合ビジネス・ビューを使用して複数のテーブルのレコードにアクセスするOne Viewアプリケーションも用意されています。One Viewの検索/表示フォームでは、商取引データとマスター・データがこれまでにない組合せで結び付けられます。このデータの組合せは、ユーザーが選択したBI Publisherレイアウトで表示可能です。データ・ブラウザを使用してレポート・データを検索し、One Viewレポートを生成することもできます。

One View Reportingには次のような利点があります。

- ほとんどのレポート・ニーズに対するITサポートが不要になるため、レポートの開発および管理のコストが削減されます。
- サードパーティのレポート製品が不要になるため、総保有コストが削減されます。
- 簡単かつリアルタイムに情報にアクセスできるため、エンドユーザーの満足度が向上します。

- 情報への低コストのアクセスが実現するため、ビジネス上の意思決定が可能になります。
- データ表示やレポート生成に必要なカスタム・アプリケーションが減少する、または不要になるため、システム・アップグレードのコストが削減されます。

1.3. One Viewレポートについて

One Viewレポートは次のコンポーネントで構成されます。

- Business Intelligence (BI) Publisherデータ・モデル: BI Publisherサーバー上の<report name>.xdmzファイルです。
- BI Publisherレポート: BI Publisherサーバー上の<report name>.xdozファイルです。
- One Viewレポートのレポート定義: レポートのメタデータで、JD Edwards EnterpriseOne内にあります。

One Viewレポートは、エンドユーザーがJD Edwards EnterpriseOneクエリー・フォームの「One View」メニューから「レポートの追加」を選択すると作成されます。これらのOne Viewレポートは、Oracle BI Publisherサーバー上に格納されます。One Viewレポートのメタデータは、JD Edwards EnterpriseOneのテーブルにも格納されます。

第2章 One View Reportingのインストールおよび構成

この章の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Publisherのインストール」
- 「BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレートのインストール」
- 「ボイラープレートへのBIAuthorロールのアクセス権限の付与」
- 「BI Publisherユーザーの構成」
- 「One Viewレポートの概要および管理」
- 「One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートの確認」
- 「One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードの作成」
- 「BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピング」
- 「One Viewレポートのインストール」
- 「構成設定の処理」
- 「HTML Serverクラスタリングに関する考慮事項」

2.1. Oracle BI Publisherのインストール

この項では、Oracle Business Intelligence (BI) Publisherのインストールの概要、事前設定、およびOracle BI Publisher 11gのインストール方法について説明します。新しいOne View Reportingソリューションは、JD Edwards EnterpriseOneの対話型アプリケーションをBI Publisherの対話型レイアウト・エディタと統合し、エンドユーザー向けの使いやすいレポート・ソリューションを生み出します。

2.1.1. Oracle BI Publisherのインストールの概要

Oracle BI Publisherは、あらゆるレポートやドキュメントの作成、管理および配布を従来のレポート・ツールより簡単かつ迅速に行うことのできるレポート・ソリューションです。

One View Reporting用には、Oracle BI Publisherをインストールするだけです。Oracle Business Intelligence Enterprise EditionやOracle Real-Time Decisionsをインストールする必要はありません。

BI PublisherとともにWebLogicもインストールされるため、WebLogicをあらかじめインストールしておく必要はありません。WebLogicのデフォルト・ドメインはBI Publisherに対して機能するため、ドメインを区別しないのであれば、追加ドメインの作成は必要ありません。

2.1.2. 事前設定

この項で説明されているタスクを実行するには、事前に次の作業を行う必要があります。

- JD Edwards EnterpriseOne One View Reportingの証明書の確認。ドキュメント745831.1 (JD Edwards EnterpriseOne Minimum Technical Requirements Reference)をMy Oracle Supportで参照してください。

<https://support.oracle.com/epmos/faces/DocumentDisplay?id=745831.1>

- サポートされているデータベースのインストールと構成。

サポートされているデータベースの最新情報は、次のURLでOracle Fusion Middlewareの動作保証に関するドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>

Oracle Fusion Middleware 11gリリース1証明書の製品エリアを探して、次のいずれかの製品のシステム要件およびサポートされるプラットフォームにアクセスしてください。

- Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition 11gR1 (11.1.1.3.0-11.1.1.6.0) (xls)。
- Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition 11gR1 (11.1.1.9.0) (xls)。
- データベースをインストールしたら、*Oracle Fusion Middleware 11gリリース1 (11.1.1.x)*のシステム要件と仕様に関するドキュメントのレポジトリ作成ユーティリティ(RCU)の要件に関する項を参照して、データベースが正しく構成されていることを確認してください。

http://docs.oracle.com/html/E18558_01/fusion_requirements.htm#CHDJGECA

次の場所でドキュメントにアクセスすることもできます。

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-requirements-100147.html>

- Oracle Software Delivery CloudからOracle BI Publisherをダウンロードします。

<https://edelivery.oracle.com>

「製品パック」フィールドでOracle Business Intelligenceを選択して、対応するプラットフォームを選択します。

- Oracle Repository Utility(RCU)を、Oracle Technology Network(OTN)のOracle Business Intelligence(11.1.1.x)のダウンロード・ページからダウンロードします。

<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/bi-enterprise-edition/downloads/bi-downloads-1923016.html>

RCUのバージョンは、BI Publisherのバージョンと一致している必要があります。

- ポップアップを許可するようブラウザを構成します。
- Adobe Flashビューアがインストール済であることを確認します。

2.1.3. Oracle BI Publisherのインストール

デフォルト設定(ポートやセキュリティ・ログインなど)を変更する予定がない場合は、『*Oracle Business Intelligence クイック・インストレーション・ガイド*』に従ってインストールを実行します。デフォルト設定を一部変更する場合は、『*Oracle Business Intelligence インストレーション・ガイド*』に従います。Oracle BIのインストール・パッケージには次の製品が収録されていて、これら製品のインストール、構成および実行に必要なテクノロジーもすべて揃っていますが、インストールが必要なのはOracle Business Intelligence Publisherのみであることに注意してください。

- Oracle Business Intelligence Publisher
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition(Oracle BI Answers、Oracle BI Interactive Dashboards、Oracle BI Delivers、Oracle BI Administration Tool、Oracle BI Add-in for Microsoft OfficeおよびOracle BI Publisher)(オプション)
- Oracle Real-Time Decisions(オプション)
- Essbase Suite(オプション)

Oracle BI Publisher 11g(11.1.1.7)はWebLogic Server 10.3.5.0およびOracle JDK 1.6.0_35とパッケージ化されています。

Oracle BI Publisher 11g(11.1.1.9)はWebLogic Server 10.3.6.0およびOracle JDK 1.7.0_80とパッケージ化されています。Oracle BI Publisherバージョン11.1.1.9のサポートは、JD Edwards EnterpriseOne Toolsリリース9.2から始まります。

重要:

One View Reporting用には、Oracle BI Publisherをインストールするだけです。

次の手順は、インストール方法を簡単にまとめたものです。この手順を最初に確認し、詳細な手順についてはインストレーション・ガイドの『*Oracle Business Intelligenceクイック・インストレーション・ガイド*』を、またはデフォルト設定を一部変更する場合は『*Oracle Business Intelligenceインストレーション・ガイド*』を使用してください。

注意:

以前のリリースで現在稼働中の場合も、BI Publisherの新規インストールをお薦めします。これによって、最新リリースに切り替える前に並列テストを実行できるようになります。

Oracle BI Publisherをインストールする手順は次のとおりです。

1. Oracle Repository Utility (RCU)を起動してBI Publisherスキーマを作成します。
(BIPLATFORMおよびMDS。)

詳細は、『*Oracle Business Intelligenceクイック・インストレーション・ガイド*』を参照してください。

2. スキーマを作成したら、Oracle Business Intelligenceインストーラを起動します。

注意:

- 特殊文字を含むユーザーIDを使用してソフトウェアをインストールしないでください。
 - BI PublisherとHTMLサーバーは、双方向のWebサービスとHTTP通信を確保するために、同じファイアウォールの内側に配置する必要があります。
 - インストール中のマシンでウイルス対策ソフトウェアが稼働している場合、インストール・プロセスの時間は長くなる可能性があります。
-

3. 該当するインストール・タイプを選択します。

- 「簡易インストール」では、Oracle Business Intelligenceのコンポーネントが、デフォルトの設定を使用して、1台のコンピュータに最低限の手順でインストールされます。管理対象サーバーはインストールされません。このインストールはデモンストレーション、評価または概念実証の使用例を対象としています。
- 「エンタープライズ・インストール」では、選択したOracle Business Intelligenceコンポーネントがインストールされ、指定したMiddlewareホーム、OracleデータソースおよびWebLogic Serverホームに関連付けられます。エンタープライズ・インストール・タイプでは個別の管理対象サーバー、bi_server1が管理サーバーとともに作成されます。以前のバージョンのBI Publisherがインストールされている場合も、このインストール・タイプを使用してください。

このインストール・タイプは本番環境にお薦めします。

- 「ソフトウェアのみインストール」では、後の構成のために既存のMiddlewareホームにソフトウェア・バイナリ・ファイルがインストールされます。
- 4. Oracle Business Intelligenceコンポーネントのインストール画面が表示されたら、「Business Intelligence Publisher」オプションのみを選択します。

注意:

Oracle BI Publisherのインストール手順の詳細は、『Oracle Business Intelligenceクイック・インストレーション・ガイド』を参照してください。

- 5. インストールおよび構成が終了したら、WebLogic管理コンソールおよびBI Serverにサインインし、次のURLを使用してサーバーが稼働していることを確認します。

`http://host:port/console` (WebLogic管理コンソール)

`http://host:9704/xmlpservlet` (BI Publisherログイン・ページ、ポート9704は「エンタープライズ・インストール」タイプのデフォルト・ポート)

- 6. その他の更新または追加要件の証明書を確認します。

EnterpriseOne HTMLサーバーとOracle BI Publisherサーバー間のSSL接続を構成するには、『JD Edwards EnterpriseOne Tools Security Administration Guide』のOne View Reportingに対するEnterpriseOne HTMLサーバーとOracle BI Publisherサーバー間のSSL接続の構成に関する項を参照してください。

2.1.4. 新規バージョンのOracle BI Publisherへのユーザーの移行

Oracle BI Publisherのバージョンを前のバージョンからアップグレードする場合、インストール後に、WebLogicユーザーを既存バージョンから新規サーバーへ移行する必要があります。

ユーザーを新規バージョンのOracle BI Publisherに移行するには、次のようにします。

1. ユーザー情報を既存BIサーバーからエクスポートします。
 - a. BI Publisher WebLogic管理コンソールにログオンします。
 - b. 「セキュリティ・レルム」を選択します。
 - c. 「移行」タブから「エクスポート」を選択します。
 - d. エクスポート・ファイルの場所を入力します。
 - e. 「保存」をクリックします。
2. ユーザー情報を新規サーバーにインポートします。
 - a. BI Publisher WebLogic管理コンソールにログオンします。
 - b. 「セキュリティ・レルム」を選択します。

- c. 「移行」タブから「インポート」を選択します。
 - d. エクスポートされたファイルの場所を入力します。
 - e. 「保存」をクリックします。
3. BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneレポートをダウンロードしてインポートします。

注意:

前のバージョンのBI Publisherでの既存レポートは正常に実行されません。手動で新規バージョンに変換する必要があります。

個人用レポートの場合は、既存レポートを選択して、「レポート定義」タブで「保存」、「別名保存」、「コピー」、「プロモート」または「同期」オプションを使用するとこの作業が行われます。

共有レポートの場合は、既存レポートを選択して、「レポート定義」タブで「コピー」、「予約」および「同期」オプションを使用するとこの作業が行われます。

詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Applications One View Reportingユーザー・ガイド』の10進数フォーマット機能の有効化に関する項を参照してください。

4. JD Edwards EnterpriseOneボイラープレート・テンプレートをアップロードします。

2.2. BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレートのインストール

JD Edwards EnterpriseOneレポート・レイアウトの作成にはテンプレート・ファイルを使用します。BI Publisherが完全にインストールされたら、JD Edwardsで作成されたボイラープレート・テンプレートをインストールできます。これらのテンプレートはOne Viewレポートの実行に必須のものではありませんが、提供されているOne Viewレポートとの間でルック・アンド・フィールの一貫性を保つために使用することをお勧めします。

BI Publisher用のJD Edwards EnterpriseOneボイラープレート・テンプレートをインストールするには、次の手順に従います。

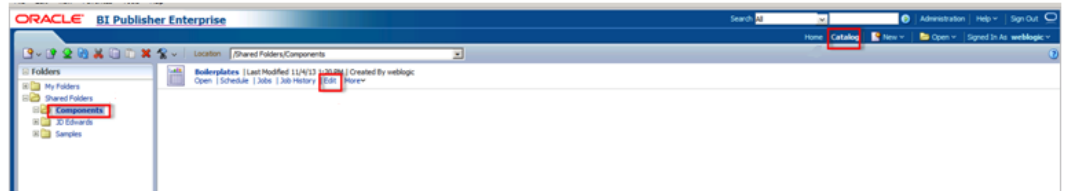
1. My Oracle SupportのUpdate CenterからOne View Boilerplatesコンポーネントをダウンロードします。

<https://updatecenter.oracle.com/>
2. 解凍プログラムを使用してJDE_Boilerplates.zipファイルから.xptファイルを抽出し、それらをハード・ドライブに保存します。
3. 管理者権限でBI Publisherにログインし、カタログに移動します。
4. 「フォルダ」ペインで、「共有フォルダ」ディレクトリ、「コンポーネント」フォルダの順に開きます。

注意:

OBIEEおよびBI Publisherの両方を同じサーバー上にインストールした場合、「コンポーネント」フォルダおよびボイラプレート機能が表示されない場合があります。これを解決するには、「[BI Publisherの「コンポーネント」フォルダにボイラプレートがない](#)」を参照してください。

5. ボイラプレート・レポートを見つけて、「編集」を選択します。



6. 画面の右上隅にある「新規レイアウトの追加」を選択します。
7. 「アップロード」を選択し、プロンプトが表示されたら、ハード・ドライブに格納された EnterpriseOneボイラプレート・テンプレート・ファイル(.xptファイル)を選択します。
8. テンプレートの名前を指定し、タイプとして「BI Publisherテンプレート」を、ロケールとして「英語」を選択します。
9. 「アップロード」を選択してテンプレートを保存します。
10. 前述の手順を繰り返して、残りのEnterpriseOneテンプレート・ファイルを追加します。

注意:

ボイラプレート・レポートに追加したBI Publisherテンプレート(.xptファイル)は、共有テンプレートとしてすべてのユーザーに表示されます。

2.3. ボイラプレートへのBIAuthorロールのアクセス権限の付与

ボイラプレートがアップロードされたら、BIAuthorロールを持つすべてのユーザーがボイラプレートにアクセスできることを確認する必要があります。ユーザー固有の設定に応じて、他のロールを対象ユーザーに割り当てる場合もあります。BIAuthorロールのみが必須です。

BIAuthorロールのアクセス権限をボイラプレートに付与するには、次の手順に従います。

1. 管理者権限でBI Publisherにログインし、カタログに移動します。
2. 「共有フォルダ」ディレクトリで「コンポーネント」フォルダを開きます。
3. 「詳細」ドロップダウン・メニュー、「権限」の順に選択します。
4. 「+」記号(作成)、「検索」ボタンの順に選択します。
5. BIAuthorロールを追加し、「OK」をクリックします。

6. BIAuthorロールのチェックボックスをすべて選択し、「OK」をクリックします。

注意:

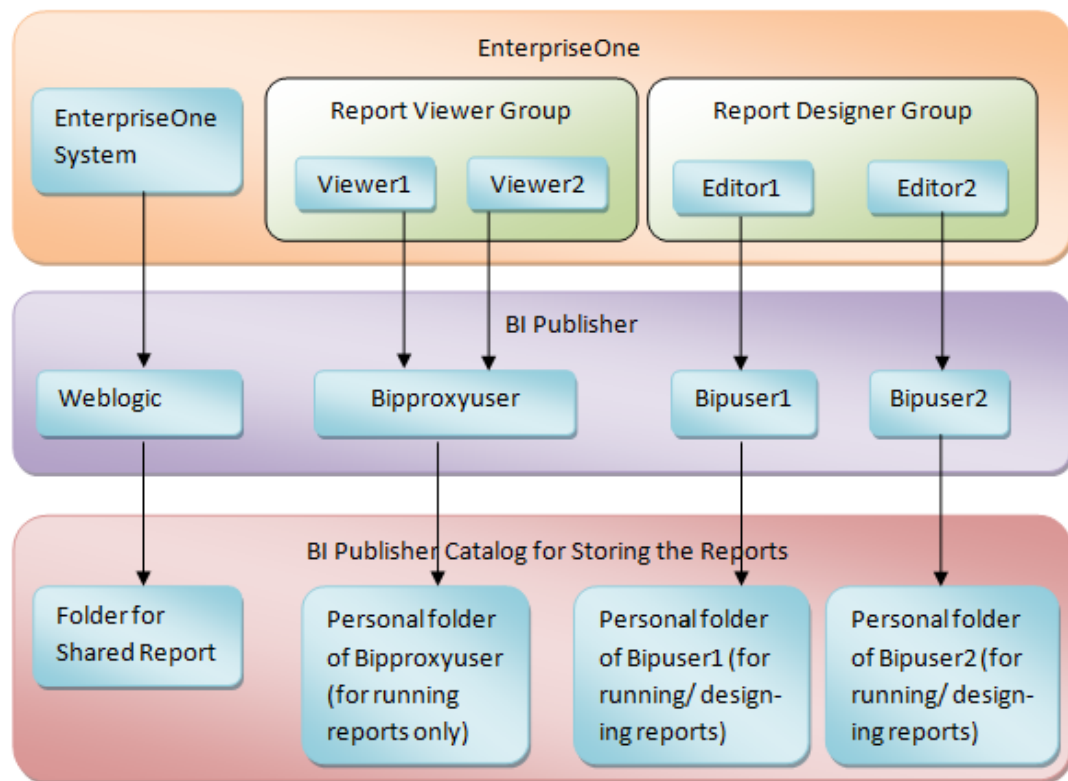
システム管理者として、ポイラプレート（*）を削除する権限をユーザーに付与するかどうかを判断する必要があります。

2.4. BI Publisherユーザーの構成

BI Publisherユーザーを構成する際、One Viewレポートを設計または作成するJD Edwards EnterpriseOneユーザーごとにBI Publisherユーザーを作成する必要があります。レポートを実行するのみで、レポートの作成を行わないすべてのJD Edwards EnterpriseOneユーザーに対して、BI Publisherでプロキシ・ユーザーを1つ設定することもできます。これにより、必要な設定作業の量が最小限に抑えられます。ただし、監査の目的で各ユーザーを個別に追跡する場合は、JD Edwards EnterpriseOneユーザーごとにBI Publisherユーザーを設定し、1対1の関係を作成してください。

次の図に、2つのユーザー・タイプとそのBI Publisherでの構成方法を示します。

図2.1 JD Edwards EnterpriseOneおよびBI Publisherでのユーザー設定



BI Publisherユーザーを構成するには、次の手順に従います。

1. WebLogic Server管理コンソールにログインします。
2. 「セキュリティ・レルム」、「myrealm」の順に移動します。
3. 「ユーザーとグループ」タブを選択し、「新規」をクリックします。
4. 名前、説明およびパスワードを指定してから「OK」をクリックして、新規BIPアカウントを作成します。

注意:

特殊文字が含まれるBIPアカウント名またはパスワードは使用しないでください。

5. 新規作成したユーザーをBIAuthorグループに追加するには、次のようにします。
 - a. 新規作成したユーザーを検索して選択します。
 - b. 「グループ」タブに移動します。
 - c. BIAuthorグループを選択して「選択済み」の下に移動します。
 - d. 「保存」をクリックします。

注意:

すべてのBI PublisherユーザーがBIAuthorグループに属している必要があります。

6. 「保存」をクリックします。
7. 新しいユーザー情報を使用してOracle BI Publisherサーバーにログオンできることを確認します。

詳細は、『*Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Publisher管理者ガイド*』を参照してください。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

各JD Edwards EnterpriseOneユーザーから対応するBI Publisherユーザーへのマッピングを設定する必要があります。これについては、この章の「[BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピング](#)」で説明しています。

注意:

すべてのBI PublisherユーザーがWebLogic Server管理コンソールで作成された後、最後の手順の提案どおりに各ユーザーでOracle BI Publisherサーバーにログオンするか、BI Publisherサーバーを再起動する必要があります。このいずれかを実行することで、これらのユーザーがJD Edwards EnterpriseOneから接続できるようになります。

2.5. One Viewレポートの概要および管理

One Viewレポートは軽量のオブジェクトとして管理されます。

各One Viewレポートは次のコンポーネントで構成されます。

- データ・モデル・ファイル。
- レポート・テンプレート・ファイル。(このファイルは、データ・モデル・ファイルと同じ名前です。)

これらのファイルはいずれもBI Publisherサーバーに格納されます。

BI Publisherサーバーでは、これらのレポートはパス・コード別に整理されます。たとえば、DV920パス・コードのOne View作業照会アプリケーション(P51220)で作成された個人用レポートは、(環境に関係なく)/BIP_user_id/DV920/P51200/というBI Publisherフォルダに格納されます。

PY900パス・コードの同じアプリケーションに対する共有レポートは、/Shared Folder/PY920/P51200/に格納されます。

P98220UおよびP98220W内の「承認/共有」機能を使用すれば、レポートを移動できます。

ソフトコード・アプリケーションでは、ソフトコード・レコードがパス・コード・レベルではなく環境レベルで処理されることに注意してください。特定のパス・コードについて、すべての環境に対してソフトコード・レコードを設定する必要があります。

2.6. One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートの確認

ナビゲータ・ドロップダウン・メニューから「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「システム管理ツール」、「ソフトコード管理」、「ソフトコード・テンプレート」の順に選択して、Webサービス・ソフトコード・テンプレート・アプリケーション(P953000)にアクセスします。P953000を使用して、One View Reporting BI Publisherソフトコード・テンプレートが次の値とともに存在することを確認します。

フィールド	値
テンプレート名	JDE_ONEVIEW_CONNECTION
記述	One View Reporting Connection Template
ソフトコード・キー	ONEVIEW_BIP_CONN
重要: ソフトコード・キーの値はONEVIEW_BIP_CONNである必要があります。このフィールドには他の値は使用できません。	

フィールド	値
値	<pre> <webservice> <endpoint>http://bip_server:bip_port</endpoint> <username>bip_user_name</username> <password>_ _BIP_PASSWORD_ _</password> <properties> <property><name>root catalog</name><value>JD Edwards</value></property> <property><name>bip version</name><value>11.1.1.7.0</value></property> <property><name>bip url</name><value>http://bip_server:bip_port</value></ property> <property><name>path code upgraded from</name><value>DV910</value> </properties> </webservice> このフィールドの指定については、次の「ソフトコード値のガイドライン」を参照し てください。 </pre>

注意:

One Viewレポートを内部ドメインだけでなく外部ドメインからも実行する場合は、bip urlプロパティを追加する必要があります。One Viewレポートを内部ドメイン（ローカル・イントラネット）からしか実行しない場合、このプロパティを追加する必要はありません。

2.6.1. ソフトコード値のガイドライン

One View Reporting BI Publisher接続テンプレートを更新する際には、次のガイドラインに従い、有効なソフトコード値パラメータを確実に指定してください。

2.6.1.1. HTTPアドレス

HTTPアドレスは、次の形式に従い、完全修飾の有効なOracle BIアプリケーション・サーバー名、またはIPアドレスおよびポート番号を指定する必要があります。

```
http://<server>:<port>
```

2.6.1.2. ユーザー名

ユーザー名は、管理権限を持つ有効なBI Publisherユーザー名である必要があります。

2.6.1.3. `_||_BI_PASSWORD_||_`

管理者がOracle BIユーザーのパスワードを指定する場合、2つの方法があります。

- ソフトコード値でプレースホルダ・パラメータ(マスクされたパラメータ)を使用し、その値をグリッド内のパラメータに割り当てます。前述の例では、BI_PASSWORDというプレースホルダ・パラメータを使用し、グリッド内でBI_PASSWORD変数を定義しています。`_||_`というプレフィックスとポストフィックスは、プレースホルダ変数のマーカーです。

このように使用すると、値は暗号化されてからデータベースに保存され、将来の表示用にマスクされます。

- ソフトコード値で直接平文を使用します。

2.6.1.4. bip url

このプロパティを追加する必要があるのは、One Viewレポートを内部ドメインと外部ドメインの両方から実行する場合のみです。

このパラメータに使用するBI Publisher URLが、外部ドメインと内部ドメインのどちらからもWebブラウザで開けることを確認します。これが必要なのは、レポート実行時に起動されたOne Viewレポート・ウィンドウがBI Publisherサーバーに接続できるようにするためです。URLが正しく設定されていれば、外部ドメインと内部ドメインのどちらから実行している場合もBI Publisherのサインイン・ページが表示されます。

2.7. One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードの作成

この項では、ソフトコード・レコードの概要とソフトコード・レコードの作成方法について説明します。

2.7.1. 概要

HTMLサーバーからBI Publisherサーバーへの接続を確立するには、BI Publisherソフトコード・レコードを設定する必要があります。ソフトコード・レコードは、環境ごと、ユーザー(またはロール、あるいは*PUBLIC)ごとに設定します。ソフトコード・レコードを*PUBLICと特定の環境に対して設定すると、その環境にログインしたユーザーはすべて、同じソフトコード・レコードを使用してBI Publisherサーバーを検索し、接続することになります。ソフトコード・レコードを設定するには、ソフトコード・レコード(P954000)アプリケーションを使用します。

設定するソフトコード・レコードの数は、ユーザーの設定方法によって異なります。複数のソフトコード・レコードを別々に設定しても構いません。ユーザーを2つのグループに分けることをお勧めします。

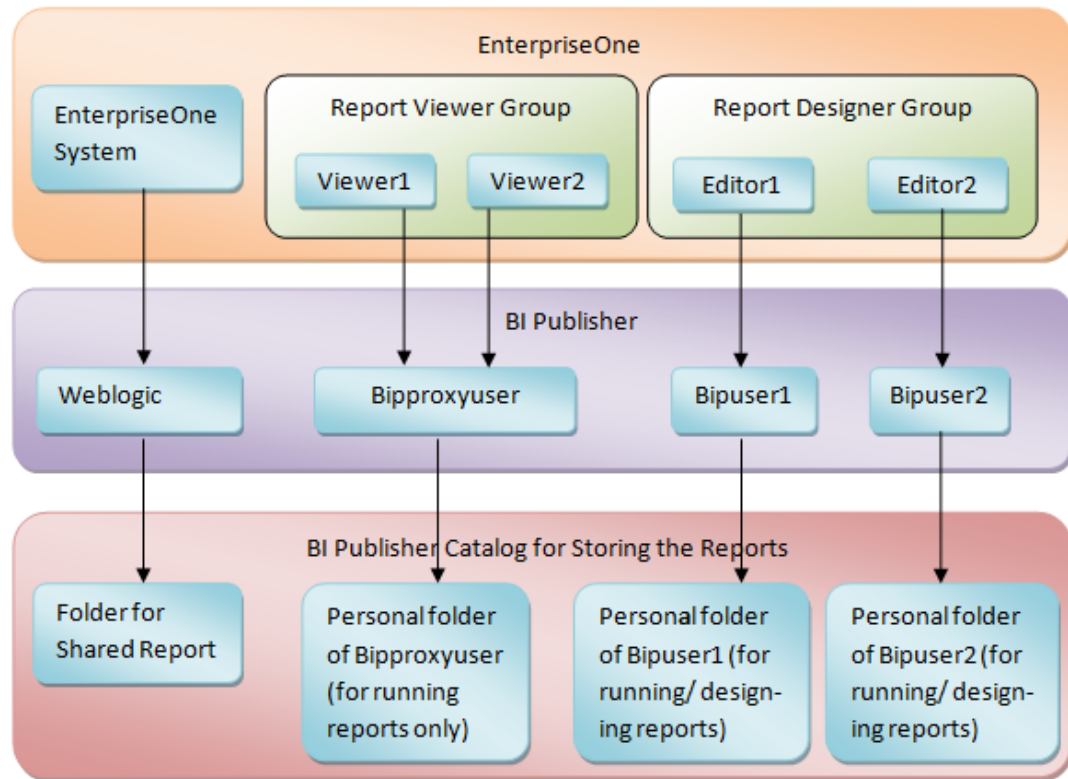
ビューア・グループ

このグループは、レポートの設計ではなくレポートの表示のみに関心があるJD Edwards EnterpriseOneユーザーで構成されます。このユーザー・グループの場合、BI Publisher プロキシ・ユーザーを1つ設定し、ソフトコード・レコード内のプロキシ・ユーザー設定を共通の個人用資格証明として共有させます。これらのユーザーのユーザー・プロファイルに、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングを設定しないでください。権限を設定する際には、JD Edwards EnterpriseOneアカウントまたは共通のJD Edwards EnterpriseOneロールにOne Viewレポートを実行する権限を割り当てます。

設計者グループ

このグループは、新規および既存のレポートを設計するJD Edwards EnterpriseOneユーザーで構成されます。このユーザー・グループの場合、JD Edwards EnterpriseOneユーザー・プロファイルに、BI Publisherサーバー上の個々のBI Publisherアカウントと、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへの個々のユーザー・マッピングを設定します。ユーザー・プロファイル内のJD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへの個々のユーザー・マッピング設定は、ソフトコード・レコードのプロキシ・ユーザー設定より優先度が高くなります。これらのユーザーにOne Viewレポートを設計および共有する権限を割り当てます。

図2.2 ビューア・グループと設計者グループの例



次の規則に基づき、ユーザー・プロファイルとソフトコード・レコードの両方で個人用資格証明があるかどうかチェックされます。

1. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれておらず、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されていない場合、One View Reportingはそのユーザーに対して無効になります。
2. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれておらず、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されている場合、そのユーザーは個人用のBI Publisherアカウントを使用してBI Publisherにアクセスします。
3. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれており、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されていない場合、そのユーザーはプロキシ・ユーザーを使用してBI Publisherにアクセスします。

4. プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの設定(任意)がソフトコード・レコードに含まれており、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherへのユーザー・マッピングがユーザー・プロファイルに設定されている場合、そのユーザーは個人用のBI Publisherアカウントを使用してBI Publisherにアクセスします。

重要:

必ず、使用する予定があるすべてのユーザーまたはロールに対してソフトコード・レコードを設定してください。

2.7.2. ソフトコード・レコードの作成

One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコードを作成するには、次の手順に従います。

1. ナビゲータ・ドロップダウン・メニューから「EnterpriseOneメニュー」、「EnterpriseOneライフサイクル・ツール」、「システム管理ツール」、「ソフトコード管理」、「ソフトコード・レコード」の順に選択して、P954000アプリケーションにアクセスします。
2. 「追加」を選択します。
3. 次の情報を入力します。

フィールド	値
ユーザー/ロール	JD Edwards EnterpriseOneユーザー、ロールまたは*PUBLICを入力します。全ユーザー用の1つのレコードを設定する場合は*PUBLICを使用します。 注意: これは管理ユーザーIDである必要があります。必ず、使用する予定があるすべてのユーザーおよびロールに対してソフトコード・レコードを設定してください。
環境名	このソフトコード・レコードを作成するJD Edwards EnterpriseOne環境を入力します。
テンプレート名	JDE_ONEVIEW_CONNECTION
ソフトコード・キー	ONEVIEW_BIP_CONN

重要:

ソフトコード・キーの値はONEVIEW_BIP_CONNである必要があります。このフィールドには他の値は使用できません。

4. 「ソフトコード値のロード」ボタンをクリックし、「ソフトコード記述」フィールドと「ソフトコード値」フィールドにJDE_ONEVIEW_CONNECTIONテンプレートの情報を取り込みます。

5. マスク・フィールドのマスク値を入力します(たとえば、BI_PASSWORDの値を入力します)。
6. プロキシ・ユーザーを使用する場合は、プロキシ・ユーザーとプロキシ・パスワードの値を入力します。これらの値の指定は任意です。ルート・カタログのプロパティの後ろに、2つの新しいプロパティを兄弟タグとして追加する必要があります。

注意:

このプロパティの名前は、proxy userおよびproxy passwordとしてください。次に例を示します。

```
<property><name>proxy user</name><value>_||_PROXY_USER_||_</value></property>

<property><name>proxy password</name><value>_||_PROXY_PASSWORD_||_</value></property>
```

グリッドに_||_PROXY_USER_||_と_||_PROXY_PASSWORD_||_の値を入力します。

7. **bip version** プロパティの値を入力します。

```
<property><name>bip version</name><value>11.1.1.9.0</value></property>
```

8. One Viewレポートを内部ドメインと外部ドメインの両方から実行する場合は、**bip url** プロパティの値を入力します。

```
<property><name>bip url</name><value>http://bip server:bip port</value></property>
```

9. サーバーとポートを特定のインストールに合わせて変更します。
10. 以前のリリースからアップグレードする場合は、**path code upgraded from** プロパティの値を入力します。

```
<property><name>path code upgraded from</name><value>DV910</value></property>
```

パス・コードは特定のインストールに合わせる必要があります。

11. 「OK」をクリックしてレコードを保存します。

注意:

各パス・コードのソフトコード・レコードを追加する必要があります。

2.7.3. ソフトコード値のガイドライン

One View Reporting BI Publisher接続テンプレートを更新する際には、次のガイドラインに従い、有効なソフトコード値パラメータを確実に指定してください。

2.7.3.1. HTTPアドレス

HTTPアドレスは、次の形式に従い、完全修飾の有効なOracle BIアプリケーション・サーバー名、またはIPアドレスおよびポート番号を指定する必要があります。

`http://<server>:<port>`

2.7.3.2. ユーザー名

ユーザー名は、管理権限を持つ有効なBI Publisherユーザー名である必要があります。

2.7.3.3. `_||_BI_PASSWORD_||_`

管理者がOracle BIユーザーのパスワードを指定する場合、2つの方法があります。

- ソフトコード値でプレースホルダ・パラメータ(マスクされたパラメータ)を使用し、その値をグリッド内のパラメータに割り当てます。前述の例では、BI_PASSWORDというプレースホルダ・パラメータを使用し、グリッド内でBI_PASSWORD変数を定義しています。`_||_`というプレフィックスとポストフィックスは、プレースホルダ変数のマーカーです。

このように使用すると、値は暗号化されてからデータベースに保存され、将来の表示用にマスクされます。

- ソフトコード値で直接平文を使用します。

2.7.3.4. bip url

このパラメータに使用するBI Publisher URLが、内部ドメインと外部ドメインのどちらからでもWebブラウザで開けることを確認します。

HTTPアドレスは、次の形式に従い、完全修飾の有効なOracle BIアプリケーション・サーバー名、またはIPアドレスおよびポート番号を指定する必要があります。

`http://<server>:<port>`

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

2.8. BI PublisherユーザーへのJD Edwards EnterpriseOneユーザーのマッピング

レポートの作成および編集を行う必要のあるすべてのJD Edwards EnterpriseOneユーザーについて、各JD Edwards EnterpriseOneユーザーをBI Publisherユーザーにマップする必要があります。

ります。パブリック・レポートを実行するのみのJD Edwards EnterpriseOneユーザーの場合、ソフトコード・パラメータの<proxy user>と<proxy password>を使用してBI Publisherに接続できるため、これらのJD Edwards EnterpriseOneユーザーをマップする必要はありません。

注意:

プロキシ・ユーザーを使用中の場合、JD Edwards EnterpriseOneユーザー・プロファイルではパスワードを求められません。

この項では、BI PublisherのユーザーIDおよびパスワードをJD Edwards EnterpriseOneのユーザー・プロファイルに入力し、EnterpriseOneユーザーの代わりにBI PublisherのユーザーIDおよびパスワードでBI Publisherサーバーに接続できるようにする方法について説明します。

JD Edwards EnterpriseOneユーザーをBI Publisherユーザーにマップするには、次の手順に従います。

1. JD Edwards EnterpriseOneの「カスタマイズ」メニューから「ユーザー別システム・オプション」を選択します。
2. 「ユーザー・プロファイルの改訂」を選択します。
3. 「フォーム」エグジットから、「BI Publisherパスワード」を選択します。
4. 「BI PublisherユーザーID」フィールドと「BI Publisherパスワード」フィールドにBI Publisherアカウントの情報を入力します。
5. 設定が有効になるように、JD Edwards EnterpriseOneからログアウトして再度ログインします。
6. BI PublisherサーバーでユーザーIDとパスワードを変更するたびに、ここでも変更を行う必要があります。

> チュートリアル:

[この機能の動画を見るにはここをクリックします。](#)

注意:

BI PublisherですべてのBI Publisherユーザーが作成されたら、BI Publisherサーバーを再起動して、それらのユーザーがJD Edwards EnterpriseOneから接続できるようにする必要があります。

2.9. One Viewレポートのインストール

アプリケーションのリリースが9.1および9.0の場合、既存のOne Viewレポートは新しい形式に変換されます。アプリケーションのリリースが9.2の場合、One Viewレポートはセントラル・オブ

ジェクトのパス・コードとともにインストールに組み込まれます。One Viewレポートを使用するには、それらを承認/共有する必要があります。

One Viewレポートが共有可能であることの確認

提供されているJD Edwards EnterpriseOne One Viewレポートの承認/共有を実行する前に、次の手順を実行して、新しいOne Viewレポートが共有可能であることを確認します。

1. BI PublisherユーザーにマップされたJD Edwards EnterpriseOneユーザーとしてHTMLサーバーにログインします。

注意:

『JD Edwards EnterpriseOne Tools Security Administration Guide』の説明に従って、ユーザーにOne View Reportingへの適切なアクセス権限があることを確認します。

2. アプリケーションを起動し、新しいレポートを追加してみます。

BI Publisher接続が正しく設定されていれば、新しいレポートを保存した後、BI Publisherレイアウト・エディタが表示されます。

3. レポートが実行可能で、レイアウトを表示できることを確認してから、「パブリッシュするリクエスト」を選択して、レポートを共有するプロセスを開始します。
4. 正しい構成を確認するために、ユーザー定義オブジェクト(UDO)管理アプリケーション(P98220U)を使用して、「プロモート保留」でフィルタ処理し、新しいOne Viewレポートを承認/共有します。
5. レポートが共有されたら、JD Edwards EnterpriseOneからサインアウトして再度サインインすることで、セキュリティ・キャッシュをリセットします。

再度サインインすると、「One View」メニューの「共有」セクションに新しいOne Viewレポートが表示されます。

提供されているOne Viewレポートの共有

新しい共有One Viewレポートが実行されたら、提供されているプロモート保留中のOne Viewレポートを共有できます。

提供されているOne Viewレポートを共有するには、次の手順に従います。

1. P98220Uを開き、「プロモート保留」でフィルタ処理してOne Viewレポートを表示します。
2. レポートを承認/共有します。
3. JD Edwards EnterpriseOneからサインアウトして再度サインインすると、レポートがアプリケーションに表示されます。

One Viewレポートのパッチまたは更新のインポート

One Viewレポートのパッチまたは更新はUpdate Centerで提供されます。

One Viewレポートの更新をインポートするには、次の手順に従います。

1. 使用しているJD Edwards EnterpriseOneバージョンおよびBI Publisherバージョンに適用可能なUDO zipファイルをUpdate Centerからダウンロードします。

<https://updatecenter.oracle.com>

2. Web OMW(P98220W)に移動します。
3. 「フォーム」メニューから「インポート」を選択します。
4. ダウンロードしたOne Viewレポートのzipファイルを見つけて選択します。
5. 「ロード」をクリックします。
6. zipファイルがインポートされると、状況11「新規プロジェクト検討保留」のプロジェクトとして表示されます。この時点では、インポートされたOne Viewレポートは状況07「プロモート保留」です。
7. ユーザーがレポートを使用できるようにするには、P98220UまたはP98220Wの「承認/共有」オプションを使用する必要があります。

「承認/共有」操作を実行すると、zipリポジトリからデータとアーティファクトが抽出され、ランタイム・テーブルとターゲットの場所にロードされます。

さらに、転送アクティビティ・ルールによってプロジェクトを進展させ、UDOを他のパス・コードに転送することもできます。転送環境にサインインするには、承認/共有を実行する必要があります。

UDO(One Viewレポートなど)のインポート、エクスポートおよび転送の詳細は、『*JD Edwards EnterpriseOne Tools Object Management Workbench for the Web Guide*』を参照してください。

UDO(One Viewレポートなど)の承認の詳細は、『*JD Edwards EnterpriseOne Tools User Defined Object Approval Application Guide*』を参照してください。

2.10. 構成設定の処理

エンドユーザー体験を最大限に高めるには、これらのWebランタイム構成設定を使用します。これらのアクセスと変更は、Server Managerの「Webランタイム」、「Webオブジェクト設定」で行えます。設定は次のとおりです。

One View Reporting: デフォルト・レコード件数

One Viewレポートを実行する際、レポートで実行されるレコードの件数は3つのオプションによって制御されます。One Viewレポートのユーザー・インターフェイス(「レイアウト」タブ)に表示される3つのオプションは次のとおりです。

- レコード件数を取得: X
- グリッドで現行データを使用
- すべてのレコードを取得

最初のオプション「レコード件数を取得」を選択すると、このServer Manager設定を使用し、レポートのデフォルト・レコード件数が設定されます。

One View Reporting: 最大レコード件数

これは、One Viewレポートに対して取得されるレコードの最大数です。

One View Reporting: 接続待ち時間

これは、BI Publisherサーバーへの接続を待つデフォルトの時間(ミリ秒)です。この時間が経過すると、最初のOne Viewレポートが起動されます。ネットワークが遅い場合はこの値を大きく、ネットワークが速い場合はこの値を小さくしてください。

ランタイム・パラメータとメトリック・パラメータのServer Managerインターフェイスでは、そのパラメータに適用される各設定の詳しい使用方法を確認できます。これにアクセスするには、目的のパラメータの「i」(情報)アイコンをクリックします。

2.11. HTML Serverクラスタリングに関する考慮事項

One View Reportingが、Oracle HTTP Server(OHS)などのHTML Serverクラスタと機能するように設定するには、次の作業が必要です。

1. ソフトコード構成アプリケーション(P954000)を開きます。
2. ONEVIEW_BIP_CONNソフトコード・レコードを選択し、次のプロパティを追加します。

```
<property><name>cluster member node ids</name><value>Mbr_1,Mbr_2</value></property>
```

```
<property><name>cluster member urls</name><value>http://myserver:8080,http://myserver:8082</value></property>
```

クラスタ・メンバー・ノードIDは、クラスタ内の管理対象サーバーです。クラスタ・メンバーURLは、クラスタ・メンバーの実際のJD Edwards EnterpriseOne HTML URLです。この情報はServer Managerコンソールから取得できます。また、クラスタ・ノードIDの順序をクラスタ・メンバーURLの順序と一致させる必要があります。

クラスタ・メンバーが他にもある場合は、カンマで区切ってこれらのパラメータに追加してください。

3. 「OK」をクリックしてレコードを保存します。
4. JD Edwards EnterpriseOneからログアウトし、ロード・バランサURLを使用して再度ログインします。

第3章 管理タスク

この章の内容は次のとおりです。

- 「One Viewレポートおよびログ・ファイルの場所」
- 「言語サポート」
- 「トラブルシューティング」
- 「パフォーマンスに関する考慮事項」
- 「スケーラビリティに関する考慮事項」

3.1. One Viewレポートおよびログ・ファイルの場所

One Viewレポートは次の場所に保存されます。

- `<MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/config/bipublisher/repository/Reports/JD Edwards`
- `<MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/config/bipublisher/repository/Users/<user or proxy name>/JD Edwards`

BI Publisherのログ・ファイルは次の場所に保存されます。

- `<MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/servers/AdminServer/logs`
- `<MW_Home>/user_projects/domains/bifoundation_domain/servers/AdminServer/logs/bipublisher`

HTMLサーバー・インスタンスには実際のOne View ReportingおよびWeb Servicesログが含まれます。

3.2. 言語サポート

現在、One View Reportingでは次の言語がサポートされています。

- アラビア語
- 簡体字中国語

- 繁体字中国語
- チェコ語
- デンマーク語
- オランダ語
- フィンランド語
- フランス語 - フランス
- ドイツ語
- ギリシャ語
- ハンガリー語
- イタリア語
- 日本語
- 韓国語
- ポーランド語
- ポルトガル語 - ブラジル
- スペイン語
- スウェーデン語
- トルコ語
- ロシア語

前述の言語を使用しているJD Edwards EnterpriseOneユーザーは、JD Edwards EnterpriseOneユーザー・プロファイルを該当する言語に設定する必要があります。実行時には、レポートをユーザーの言語で実行するためにユーザーの使用言語がBI Publisherに渡されます。

また、BIレイアウト・エディタのUI言語をユーザーが選択した言語に設定することも必要です。BI Publisherレイアウト・エディタで言語を設定するには、ユーザー名をクリックし、「マイ・アカウント」をクリックします。BI Publisherレイアウト・エディタには言語関連の設定が2つあります。

レポート・ロケール

BI Publisherレポートを実行する際の言語です。このフィールドは空白でも構いませんが、その場合はJD Edwards EnterpriseOneユーザーの言語設定を使用して適切なレポート・ロケールが渡されます。

UI言語

BI Publisherレイアウト・エディタ内のメニューおよび説明の言語です。これは、ユーザーが選択した適切な言語に変更できます。

提供されているすべてのJD Edwards EnterpriseOne One Viewレポートの内容は、前述の言語での翻訳です。

3.3. トラブルシューティング

この項では、発生する可能性のある問題と考えられる解決策について説明します。

3.3.1. 「One View」メニューがアプリケーションに表示されない

P01012やその他のアプリケーションに「One View」メニューが表示されない場合は、次のことを確認してください。

- JD Edwards EnterpriseOneユーザー・マッピングがP0092で正しく設定されていること。これは大文字小文字が区別されます。
- ユーザーIDとパスワードを使用してBI Publisherサーバーにログインできること。
- BI PublisherアカウントのロールがBIAuthorであること。
- 環境とユーザーの正しい組合せに対して、P954000でソフトコード・レコードが設定されていること。
- ユーザー定義オブジェクトの表示セキュリティと操作セキュリティがP00950でユーザーに対して設定されていること。
- One View Reportingを使用するための適切な権限があること。

3.3.2. 「One View」メニュー・アイコンをクリックしても何も起こらない

「One View」メニュー・アイコンをクリックしても何も起こらない場合は、ブラウザのファイル・キャッシュを必ずクリアしてください。

3.3.3. レポートの保存時にエラーが発生する

レポートを保存しようとしたときにエラーが発生する場合は、次のことを試してください。

- BI Publisherユーザーとパスワードのマッピングがユーザー・プロファイルに正しく設定されていることを確認します。
- BI Publisherサーバーを再起動して問題が解決するか試します。
- HTMLサーバーのエラー・ログにユーザーとパスワードが無効であるというエラー・メッセージが記録されている場合、ユーザー・プロファイルのユーザーとパスワードがBI Publisherサーバーと一致していません。

- JVM設定が正しく構成されていることを確認してください。

3.3.4. BIPレイアウト・エディタですべてのレポートについてエラーが発生する

BIPレイアウト・エディタでOne Viewレポートをレンダリング中に、赤色のエラーや「PDFが見つかりません」というエラーが表示された場合は、次のことを確認してください。

- マシンが有線ネットワークを使用した企業ファイアウォールの内側にあること。無線ネットワークを使用している場合は、企業ファイアウォールの外側にあっても構いません。
- BI PublisherサーバーとHTMLサーバーが同じファイアウォールの内側にあること。そうでない場合は、IT部門に連絡し、BI PublisherサーバーとHTMLサーバーが相互にpingできるようネットワーク・セキュリティが設定されていることを確認してください。
- BI PublisherとHTMLサーバーが異なるドメインに存在する場合は、フル・アドレス(フル・ネームとドメインからなるIPアドレス)を使用してHTMLサーバーにアクセスしていること。

3.3.5. 「レポートを保存できませんでした」というエラーが発生する、または共有レポートの実行中に問題が発生する

作成中のレポートのデータ・モデルを保存しようとしたときに「レポートを保存できませんでした」というエラー・メッセージが表示された場合、または共有レポートを実行しようとしたときに「処理中」というポップアップ・メッセージが一瞬表示されるのみで何も起こらない場合は、JD Edwards EnterpriseOneからBI Publisherサーバーへの接続に問題が発生している可能性があります。BI PublisherでBI Publisherユーザーを作成した後、JD Edwards EnterpriseOneから接続しようとする前に、BI Publisherサーバーを再起動する必要があります。

3.3.6. BI Publisherの「コンポーネント」フォルダにボイラープレートがない

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (OBIEE) およびBI Publisherを同じサーバー上にインストールした場合、「共有フォルダ」の下に「コンポーネント」フォルダにボイラープレート機能が表示されない場合があります。

ボイラープレート機能をリロードするには、次のようにします。

1. BI Publisherサーバー(<http://host:port/xmlpserver>)にサインオンします。
2. 次のように「管理」、「システム・メンテナンス」、「サーバー構成」を選択します。

図3.1 サーバー構成



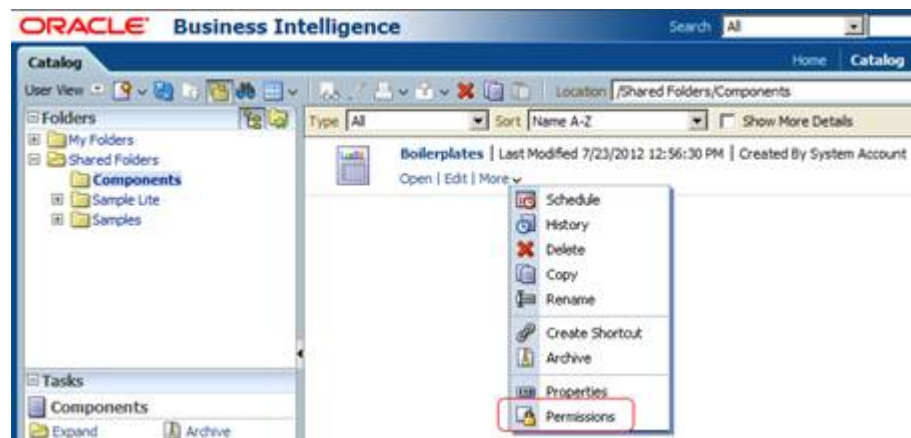
3. 「カタログ」フォームで「BIプレゼンテーション・カタログへのアップロード」をクリックします。
- 「管理」ページの右上隅に確認メッセージが表示されます。
4. 「適用」をクリックして構成を保存します。
5. アップロードが完了すると、「共有フォルダ」で「コンポーネント」が有効になって表示されます。

注意:

これはOBIEEでの統合BI Publisherであるため、BI Publisherからは権限を編集できません。セキュリティはOBIEEから編集する必要があります。

6. 権限を編集するには、OBIEE (<http://host:port/analytics>)にサインインします。
7. 「詳細」を選択してドロップダウン・メニューを開いてから、「権限」を選択します。

図3.2 権限



8. 権限を確認して、適宜編集します。

3.3.7. One Viewレポートのインポート中のバージョン不一致エラー

One Viewレポートとソフトコード・バージョン間でバージョンの不一致があることを示すエラー・メッセージを受け取った場合は、ソフトコード・レコードで最新バージョンのBI Publisher用のプロパティが欠落しています。

3.3.8. レポートが最大レコード数を越えた旨の警告

レポートの実行時に、レポートが最大レコード数を越えた旨の警告が表示された場合は、レポートの「ローセットを選択」の値が原因になっている可能性があります。ローセット・オプションは、レポートで使用するデータを指定するものです。「レコード件数を取得」オプションを使用する場合、レポートには、指定したレコード数を越える数のレコードがクエリー条件と一致していても、指定したレコード数までのデータが表示されます。このフィールドのデフォルトは500ですが、この値の構成は会社ごとに異なっても構いません。また、取得するレコードの数を制限する場合は、レポートの実行時または新規レポートの追加時に、この値を一時変更できます。

「ローセットを選択」の値として「グリッドで現行データを使用」オプションを選択すると、レポートにはグリッドのデータのみが表示されます。そのため、クエリー条件に一致するレコードがグリッドの現行データより多い場合は、この警告が表示されることがあります。

最後に、「すべてのレコードを取得」オプションを使用する場合は、レコード数がシステム制限を超えると、この警告が表示されます。

レポート・データがこの設定により制限されている場合、次のポップアップ警告が表示されます。「警告: レポートで最大数を越えるレコードが指定されています。表示された結果は不完全です。」この警告で「OK」をクリックすればレポートは実行されますが、「レコード件数を取得」フィールドで指定した値に基づいて該当するデータのサブセットのみが返されます。

注意:

前述のとおり、レポートはレポート・データ・セットで指定したロー数によって制限されますが、システム制限によっても制限されます。システム制限がレポート・データ・セットの制限より小さい場合、小さい方のデータ制限が適用されます。たとえば、One Viewレポートのデータ・セット制限が10000ロー、システム制限が5000ローの場合、One Viewレポートは5000ローに制限されます。

詳細は、『JD Edwards EnterpriseOne Applications One View Reportingユーザー・ガイド』の「One Viewレポートの実行」の「レイアウト」タブに関する項を参照してください。

3.3.9. レポートが存在しないため、レポートにアクセスできない

レポートを実行しようとしたときやレポートにアクセスしようとしたときに、BI Publisherサーバーに存在しないためレポートにアクセスできない旨のエラー・メッセージを受け取った場合、あるプロパティがソフトコード・レコードに指定されていないことが原因になっている可能性があります。以前のリリースのJD Edwards EnterpriseOneからアップグレードしたばかりであれば、このプロパティ **path code upgraded from** を追加する必要があります。

このプロパティの追加の詳細は、「[ソフトコード・レコードの作成](#)」を参照してください。

3.4. パフォーマンスに関する考慮事項

各レポートのパフォーマンスは、各レポートが取得するローの数、各レポートが処理するロジックの量、およびレポート上のグラフィカル・コンポーネントとテーブル・コンポーネントの数によって変わります。

レポートのパフォーマンスを向上させるには、次の手順に従います。

1. 各レポートが取得するローの数を制限します。
2. 各グリッド・ローについて、One Viewレポート・アプリケーションでフェッチされるイベント・ルールを確認します。
3. レポートのグラフィカル・コンポーネントとテーブル・コンポーネントを確認します。カラム数の多いピボット・テーブルは、レンダリングに長時間かかることがあります。この場合は、ピボット・テーブルのカラム数を減らします。

一般に、データ・モデルで選択されているフィールドの数を減らすと効果的です。これにより、レポートの生成とレンダリングが高速化されます。

One View Reportingは対話型のソリューションであり、何万件ものデータベース・レコードを取得するように設計されていません。大量のデータを扱う必要がある場合は、読取専用のJDBCドライバまたはUBEレポートを使用すると、パフォーマンスが向上します。

3.5. スケーラビリティに関する考慮事項

One Viewレポートを実行すると、HTMLサーバーがレポート・データを取得します。データは、レポートのレンダリングと生成のためにBI Publisherサーバーに渡されます。つまり、One Viewレポートを実行するとHTMLサーバーとバックエンド・データベースの負荷が増えます。負荷の増加量は、システムにクエリー・ユーザーを追加した場合とほぼ同じです。

パート II. One View財務諸表の管理

JD Edwards One View財務諸表機能は、One View Reporting for Financialsの拡張機能です。これを使用すると、企業の財務スタッフが財務諸表(貸借対照表や損益計算書など)の設計および生成の方法を管理できます。

One View財務諸表機能では、One View Reportingの基盤(データに対するクエリーの実行、BI Publisherレイアウト・エディタを使用した財務諸表レイアウトの設計など)を使用できます。財務諸表で使用する要素(カラムとローの定義など)を設定し、次に財務諸表の生成時に使用する計算書定義、バージョンおよびレイアウトを設定します。

構成は次のとおりです。

- [4章「One View財務諸表の構成」](#)

第4章 One View財務諸表の構成

この章の内容は次のとおりです。

- 「One View財務諸表用のOracle BI Publisherの構成」

4.1. One View財務諸表用のOracle BI Publisherの構成

One View財務諸表アーティファクト(データ・モデルやレポートなど)はすべて、P09340フォルダ内に作成されます。このフォルダをOracle BI Publisherで作成し、このフォルダに対する権限をBI作成者ロールに割り当てる必要があります。

Oracle BI PublisherをOne View財務諸表用に構成するには、次の手順に従います。

1. 管理者権限でOracle BI Publisherにログインします。
2. /JD Edwards/<path code>フォルダの下に**P09340**という名前のフォルダを作成します。
3. BI作成者ロール用に、「Read」、「書込み」、「削除」、「レポートをオンラインで実行」および「レポート出力の表示」権限をこのフォルダに割り当てます。
4. 「OK」をクリックします。

これが、One View財務諸表で非BI Publisher管理プロキシ・ユーザーを使用するために必要な最小限の構成です。

注意:

従来のOne Viewレポートの場合、個人用レポートのアーティファクトはプロキシ・ユーザー専用の個人フォルダ(/jdeproxy/JD Edwards/STAGINGA/P01012/P01012Report9.xdmなど)に格納されます。前述の例は、プロキシ・ユーザーjdeproxyを使用してP01012アプリケーションで設計したレポートのサンプル・パスです。

One View財務諸表のOracle BI Publisherアーティファクトは常に*PUBLICであるため、この追加の設定が必要になります。

パート III. One Viewウォッチリスト管理

One Viewウォッチリストはユーザー定義基準に一致するアイテムのコレクションを表します。これを使用すると、警告対象にする情報を定義できます。たとえば、実行が必要な未処理タスクや、超過したしきい値の警告を受け取ることができます。ウォッチリストを使用すると、ユーザーは、こうした情報を簡単に受け取ることができます。

管理者はOne Viewウォッチリストを利用して、ウォッチリストを表示、作成および共有できるユーザーを安全に管理できます。アクセス権がある既存のウォッチリストが存在する場合、「ウォッチリスト」メニューがJD Edwards EnterpriseOne内のメニュー・バーに表示されます。

ウォッチリストはJD Edwards EnterpriseOneクエリーから構築されるため、クエリー機能をサポートするフォームでのみサポートされます。

構成は次のとおりです。

- [5章「One Viewウォッチリストの管理タスク」](#)

ウォッチリストのセキュリティの設定方法については、『*JD Edwards EnterpriseOne Tools Security Administration Guide*』を参照してください。

第5章 One Viewウォッチリストの管理タスク

この章の内容は次のとおりです。

- 「トラブルシューティング」
- 「パフォーマンスに関する考慮事項」

5.1. トラブルシューティング

この項では、発生する可能性のある問題と考えられる解決策について説明します。

5.1.1. ウォッチリストが実行されない

WebSphere Application Serverを使用中で、JD Edwards EnterpriseOneを連携またはクラスタ化されたWebサーバーの構成要素として実行している場合、最新のToolsリリースのデプロイ後にWebSphereグローバル・プラグイン構成の再生成が必要になる場合があります。これは、新規サーブレットがデプロイ中のToolsリリースに追加されている場合は必須です。

WebSphereグローバル・プラグインを再生成するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server(WAS)コンソールを開きます。
2. 「環境」ツリー構造を開きます。
3. 「グローバルWebサーバー・プラグイン構成の更新」オプションを選択します。

図5.1 グローバル・プラグイン構成の更新



4. 「OK」をクリックして、新規プラグインを生成します。
5. 新規ファイルの認識のためにHTTPサーバーを再起動します。

5.1.2. 「更新に失敗しました - クエリーが見つかりません」エラー

このエラーは、システムがウォッチリストの更新を試行するときに表示される場合があります。これは、ウォッチリストの基準になるクエリーが削除されている場合、またはユーザーにク

エリーへのアクセス権がない場合に発生します。たとえば、ユーザーが属していない特定のロールに対してクエリーが設定される場合があります。

問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1. クエリーがまだ存在していることを確認します。
- 2. P00950でアプリケーション・クエリーのセキュリティをチェックして、クエリーを表示する権限がユーザーにあることを確認します。この情報にアクセスするには、「フォーム」、「ユーザー定義オブジェクト」、「表示」の順に選択します。

5.1.3. ユーザーにウォッチリストへのアクセス権がない

ユーザー定義オブジェクトの表示セキュリティまたは操作セキュリティをユーザーに対して設定し、JD Edwards EnterpriseOneをサインアウトしてから戻った後、そのユーザーにウォッチリストへのアクセス権がまだない場合は、セキュリティ・キャッシュをクリアする必要があります。Server Managerに移動し、JDBjセキュリティ・キャッシュをクリアすると、問題を解決できます。

5.2. パフォーマンスに関する考慮事項

ウォッチリストは、Webサーバーの負荷を軽減する目的で設計されています。クエリーによるウォッチリストの実行は、同じ情報を得るために関連付けられたアプリケーションを開くよりも、必要なオーバーヘッドが少なくなります。アプリケーションを開かずに、ユーザーが必要な情報を「ウォッチリスト」メニューから取得できれば、実質的に、Webサーバーの負荷減少して生産性が向上します。

ウォッチリストのリフレッシュ間隔を5分に定義しても、ウォッチリストが5分ごとに実行されるわけではありません。ユーザー・アクション（「ウォッチリスト」ドロップダウン・メニューをクリックするなど）が実行されると、更新の必要性を確認するため、ウォッチリストがリフレッシュ間隔を確認します。つまり、ユーザー・アクションが実行されなければ、ウォッチリストは実行されません。

ユーザーが設定するウォッチリストが、Webサーバーのパフォーマンスに悪影響を及ぼさないようにするための構成設定がいくつかあります。この設定は、「Webオブジェクト設定」見出しの下にあるServer Managerの「Webランタイム」セクションにあります。

Webオブジェクト設定	値
ウォッチリスト: 返されるデフォルト最大レコード数	「ウォッチリストの管理」タブで「返される最大レコード数」フィールドのデフォルト値を指定します。これは、ウォッチリストの作成時に使用されず。

Webオブジェクト設定	値
ウォッチリスト: 返される上限最大レコード数	ウォッチリストの「返される最大レコード数」フィールドにユーザーが入力できる最大値を指定します。ユーザーがウォッチリストの作成または編集時にこれを超える値を設定すると、エラーが返されます。
ウォッチリスト: デフォルト・リフレッシュ間隔	「ウォッチリストの管理」タブで「リフレッシュ間隔」フィールドのデフォルト値(分)を指定します。これは、ウォッチリストの作成時に使用されます。
ウォッチリスト: 下限リフレッシュ間隔	ウォッチリストの「リフレッシュ間隔」フィールドにユーザーが入力できる最小値(分)を指定します。
ウォッチリスト: スレッド数	同時に更新できるウォッチリストのユーザーごとの最大数を指定します。

ウォッチリストの作成の詳細は、『*JD Edwards EnterpriseOne Applications One View Watchlists Implementation Guide*』を参照してください。

用語集

共有レポート	セキュリティ設定で制限されていないかぎり、システム全体で利用できるOne Viewレポート。ユーザーが共有レポートを直接変更することはできません。共有レポートは、パワー・ユーザーが個人用レポートからプロモートする必要があります。
個人用レポート	ユーザーの個人用フォルダ内にあり、そのユーザーが所有しているOne Viewレポート。
レポート定義	One ViewレポートについてのJD Edwards EnterpriseOneメタデータ。レポート定義には、データ・モデル内で選択されているカラム、命名規則、ロー・セット設定およびレポート名についての情報が含まれています。
BI Publisherデータ・モデル	BI Publisherがレポートのデータを取り込み、構築するための指示セットを含むオブジェクト。データ・モデルは、カタログ内に個別のオブジェクトとして存在します。これには、サンプル・グリッド・データ、フォーム・レベル情報およびデータ・ソースへの参照が含まれます。
BI Publisherレイアウト	テンプレート・ファイルと、レポートへのデータの表示方法が定義された、テンプレート・ファイルのレンダリングに関する一連のプロパティ。BI Publisherは、Microsoft Word、Adobe Reader、Microsoft Excel、Adobe Flash、BI Publisher独自のレイアウト・エディタなど、各種ソースから作成されたテンプレートをサポートしています。1つのレポートに複数のレイアウトを含めることができます。
BI Publisherレイアウト・エディタ	すべてのBI Publisherレイアウトの設計に使用できるWebアプリケーション。
BI Publisherレポート	BI Publisherデータ・モデル、BI Publisherレイアウト、プロパティおよび翻訳の参照からなるレポート。
One Viewウォッチリスト	ユーザー定義基準に一致し、ユーザーが警告対象に選択した情報が含まれるアイテムのコレクション。
One Viewレポート	JD Edwards EnterpriseOneレポート定義とBI Publisherデータ・モデルおよびレポートを含む統合レポート。

索引

あ

ウォッチリスト

- Webオブジェクト設定, 55
- クエリーが見つかりません, 54
- 更新に失敗しました, 54
- 実行されていない, 53
- トラブルシューティング, 53
- パフォーマンスに関する考慮事項, 55

か

構成設定, 36

さ

最大レコード件数, 36
ソフトコード・レコード
作成, 31

た

デフォルト・レコード件数, 36

B

BI Publisherソフトコード・テンプレート, 26
BI Publisherユーザー
構成, 24
BI PublisherユーザーへのJD Edwards
EnterpriseOneユーザーのマッピング, 33
BI Publisher用のボイラープレート
インストール, 22
BIAuthorロール, 23

O

One View Reporting BI Publisherソフトコード・レコード
ド
概要, 28
作成, 31
One View Reporting BI Publisherのソフトコード・テン
プレート, 26
One View Reporting BI Publisherのソフトコード・レ
コード, 28
One View Reporting
概要, 14
利点, 14

One Viewレポート

概要, 26

管理, 26

Oracle BI Publisher

インストール, 19

インストールの概要, 17

概要, 13

ユーザーの移行, 21

